

15歳～49歳男女 3万1千人に聞く
「高校生と親世代の生殖や性に関する意識と実態調査」
調査結果概要

①事前調査 10代～40代の男女に聞く、結婚と出産、生殖や性に関する知識

10代では39.3%、20代では41.5%が「子どもを授かりたい」
一方、子どもを望まない理由「国や自治体の支援が不足」「経済的に難しい」が上位を占める

1-2p

- 「子どもを授かりたい」10代39.3%、20代41.5%。
- 子どもを授かりたくない理由の上位は、「国や自治体の制度などの出産・育児支援が不足」「経済的に難しい」。

生殖や性について「小学校の授業」や「中学校の授業」で教わりたかった人がそれぞれ約4割
親の約9割が、自分の子どもへの「性教育をしたことがない」

3-8p

- 生殖や性に関する教育を受けたかった理想の年齢は、10代13.5歳、20代14.7歳、30代15.1歳、40代15.2歳。
- 実際に正しい知識を得た年齢は10代13.8歳、20代15.0歳、30代15.2歳、40代15.5歳。
- 妊孕性に関する知識
問.男性は精子の産生のみで受精能力がある（誤り）：正答率10代25.8%、20代27.6%、30代30.5%、40代30.3%。
問.月経があれば妊娠することができる（誤り）：正答率10代25.9%、20代27.5%、30代30.9%、40代32.2%。
問.夫婦5～6組のうち約1組は不妊（正しい）：正答率10代22.7%、20代26.8%、30代29.3%、40代28.1%。
- 生殖や性に関する知識を得たのは、「中学校の授業」「小学校の授業」「高校の授業」など学校の授業。
- 教わった内容は「男女の身体の違い」「男女の身体の機能の違い」「妊娠の仕組み」「月経（排卵）が起きる仕組み」が多い。
- 「ジェンダーの多様性やLGBTQ+」について10代は半数以上が学んでいるが、年代が上がるとともに教わっていない割合が高まる。
- 自身の子どもに生殖や性に関する教育をした経験がある親は、20代8.0%、30代8.7%、40代8.6%。

②本調査 高校生と高校生の親に聞く、子世代と親世代間の生殖や性に関する実態

生殖や性に関して、親の73.0%は子どもに正しく伝える「自信がない」

9-11p

- 生殖や性に関して親子で「十分話したことがある」高校生は男女とも8.0%、話したことがない理由の上位は「気まずい」「恥ずかしい」。
- 親の25.3%が生殖や性に関する知識がなくて「困った経験あり」。
- 親の73.0%は、自身の子どもに生殖や性に関する知識を正しく伝えられる「自信がない」。

高校生にとって生殖や性に関して情報源にしている人や機関は「学校の先生」および「友人」が上位。
一方、信頼できる情報源は「学校の先生」（男子高校生28.0%、女子高校生43.0%）
親は、信頼できる人や機関、メディアの情報源はいずれも、「特にない、わからない」が最多

11-15p

- 生殖や性に関して医学的に正しい情報が得られている男子高校生は48.0%、女子高校生は54.0%、男子高校生の父は19.0%。
- 男子高校生にとっての生殖や性に関する情報源（人や機関）は「友人・知人」、女子高校生は「学校の先生」。一方、親にとっての生殖や性に関する情報源は、「特にない・わからない」が半数と最多。
- 生殖や性に関する情報を得る際に信頼できるメディアは、高校生は男女とも「学校の教材」が一番多いものの「特に気にしていない、わからない」が最多。親も「特に気にしていない、わからない」が約半数と最多。

女子高校生の8割が身体の悩みを抱えるも、約6割は「誰にも相談しない」

16p

- 男子高校生の52.0%、女子高校生の80.0%が身体の悩みを抱えている。
- 身体の悩み、男子高校生は「睡眠不足」「体型」「ストレス過多」、女子高校生は「体型」「体毛」「生理痛」。
- 身体の悩みを相談する相手、男子高校生は「友人・知人」「母親」「父親」、女子高校生は「母親」「友人・知人」「SNS」の順。
- 身体の悩みを誰かに相談するのは、男子34.0%、女子43.0%で、男女とも相談しない人が多い。

「高校生と親世代の生殖や性に関する意識と実態調査」調査概要

①事前調査 (1-8p) ●実施時期 2024/3/15 (金)～3/17 (日) ●調査方法 インターネット調査 ●調査対象 全国の15歳～49歳男女31,000人
(人口動態に合わせてWB集計) ②本調査 (9-16p) ●実施時期 2024/3/15 (金)～3/18 (月) ●調査方法 インターネット調査 ●調査対象 全国
の高校生の男女200人 (男女各100人) + 第1子が高校生の親400人 (男子高校生の父・母各100人、女子高校生の父・母各100人)

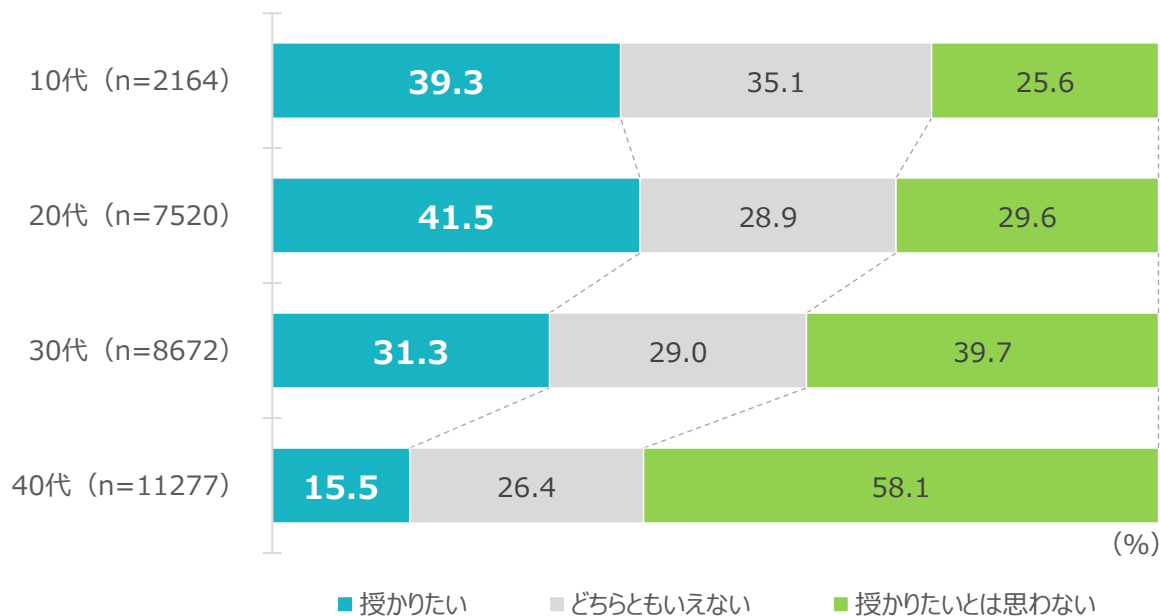
※本調査に記載の数値は、小数第2位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

10代～40代に聞く、将来設計

■「子どもを授かりたい」と答えた人は、10代39.3%、20代41.5%

10代～40代の男女31,000人（人口動態に合わせてWB集計）を対象に、調査（事前調査）を行いました。
将来子どもを授かりたいか、既に子どもがいる人はさらに授かりたいかを聞くと、10代は39.3%、20代は41.5%が将来子どもを「授かりたい」と答えました【図1】。

【図1】 将来、子どもを授かりたいか（単一回答）



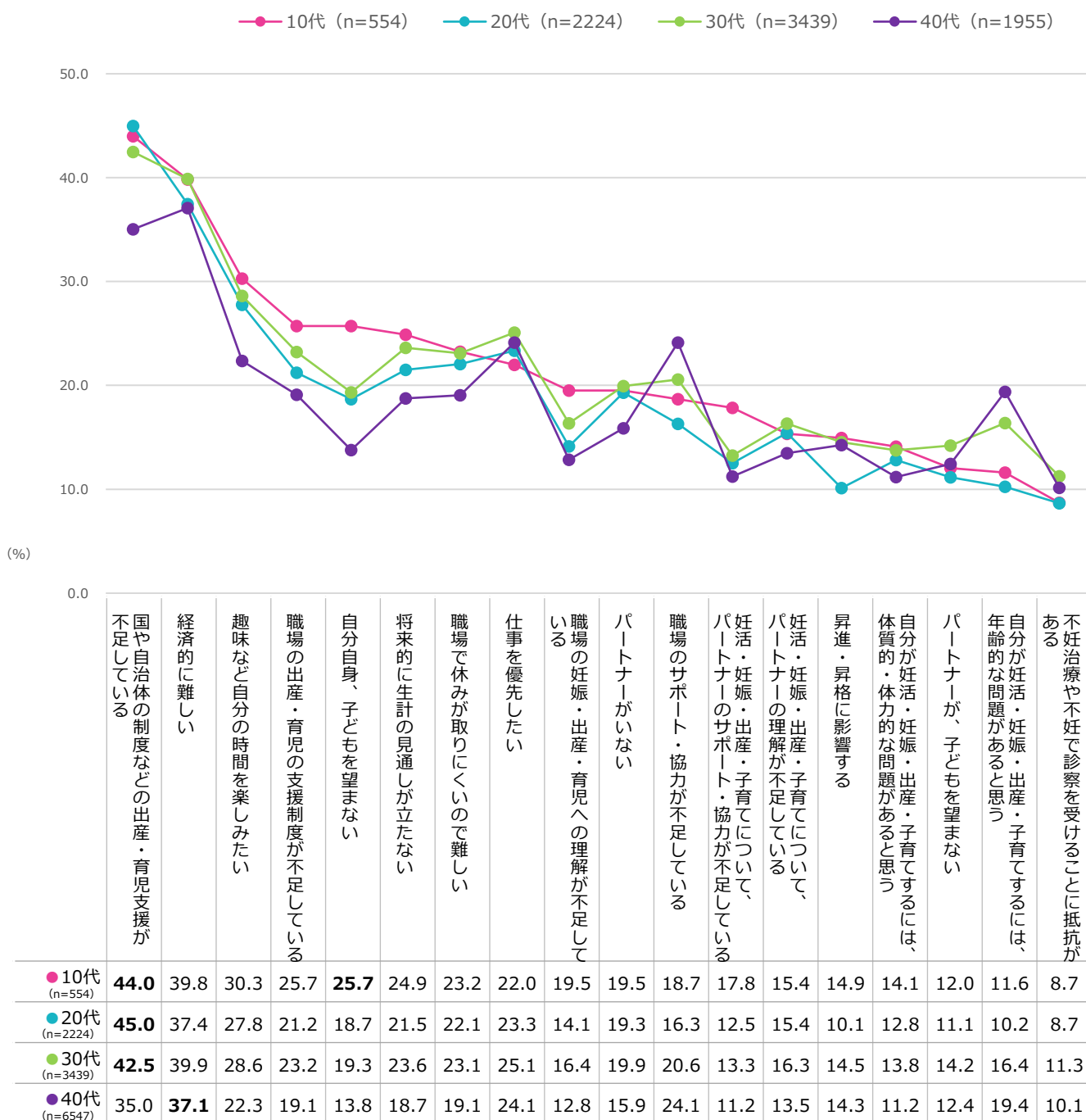
10代～40代に聞く、将来設計

■ 子どもを授かりたくない理由は、「国や自治体の支援が不足」「経済的に難しい」

前問で“子どもを授かりたいと思わない”と回答した人にその理由を聞きました。10代・20代・30代は「国や自治体の制度などの出産・育児支援が不足している」（10代44.0%、20代45.0%、30代42.5%）が最も多く、40代は「経済的に難しい」（37.1%、）がいちばんの理由として挙げられました。また、10代は「自分自身、子どもを望まない」（25.7%）、40代は「自分が妊活・妊娠・出産・子育てするには、年齢的な問題があると思う」（19.4%）という理由も他の年代に比べ高くなっています〔図2〕。

〔図2〕 子どもを授かりたくない理由（複数回答）

（グラフは10代のスコア順に表示）



10代～40代に聞く、生殖や性の知識

■ 生殖や性に関する教育を受けたかった年齢は10代で13.5歳

どの年代の人も、実際に知識を得た年齢よりも早く教育を受けたかったと回答

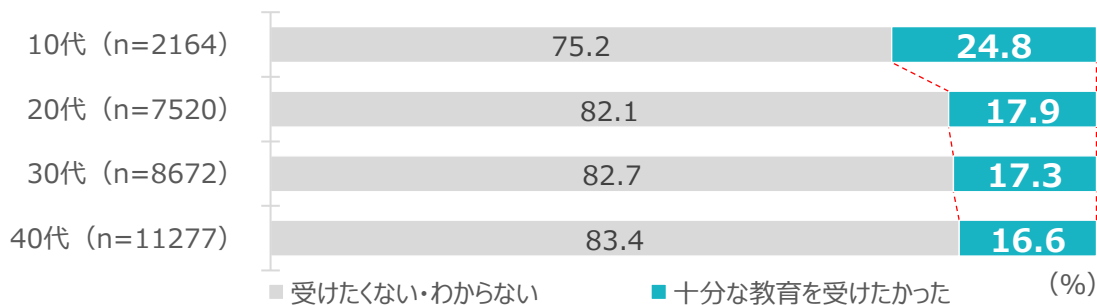
次に、生殖や性に関する知識について聞きました。

まず、生殖や性に関する十分な知識を得たかと聞くと、10代は32.3%が「得た」と答えていますが、年代が上がるともに少なくなり、40代は12.9%でした〔図3-1〕。生殖や性に関する十分な教育を受けたかったかと聞くと、10代は24.8%が「受けたかった」と答えていますが、こちらも年代が上がるともに少なくなっています〔図3-2〕。また生殖や性に関する教育を受けたかった年齢（理想）と実際に知識を得た年齢（現実）を聞きました。生殖や性に関する教育を受けたかった人の理想の年齢は平均で、10代13.5歳、20代14.7歳、30代15.1歳、40代15.2歳でした。一方、実際に生殖や性に関する知識を得た平均年齢は、10代13.8歳、20代15.0歳、30代15.2歳、40代15.5歳となりました。生殖や性に関する知識について、どの年代も実際よりも早く教育を受けたかったという結果で、年代が上がるほど遅いことがわかりました〔図3-3〕。

【図3-1】 生殖や性に関する十分な知識を得た経験（単一回答）



【図3-2】 生殖や性に関する十分な教育を受けたい意向（単一回答）



【図3-3】 生殖や性に関する十分な知識を得た現実の年齢と教育を受けたかった理想の年齢（単一回答）



10代～40代に聞く、生殖や性の知識

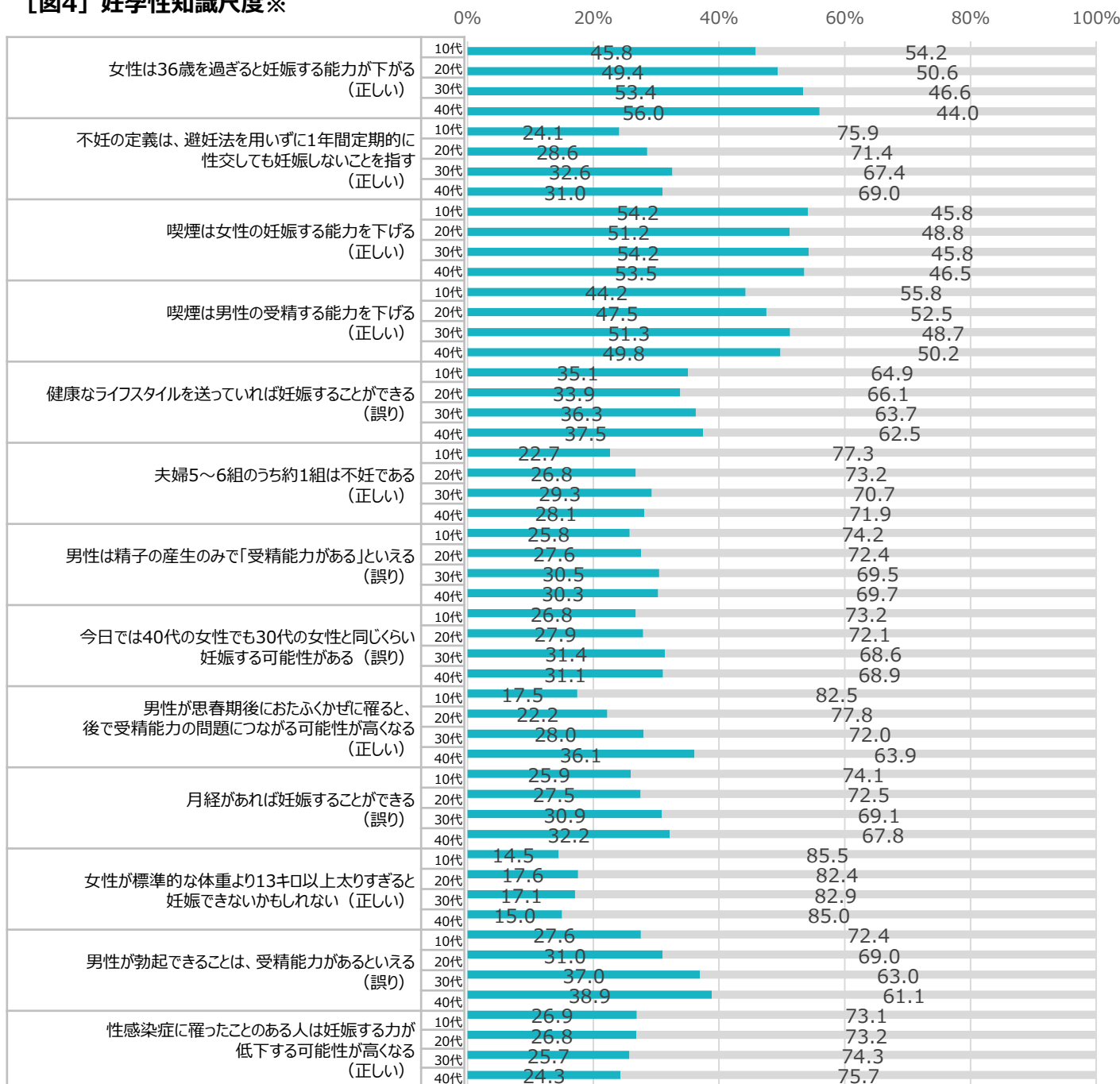
にんようせい

■ 妊孕性知識の平均点は100点満点中45.6点

妊娠のしやすさ、妊娠する力のことを「妊孕性（にんようせい）」と言い、この妊孕性に関する知識を図る指標として、妊孕性知識尺度があります。これは、妊娠・出産に関する13項目について、「正しいと思う」「誤りと思う」「わからない」のいずれかで回答するもので、全13問となっています。

今回の調査での妊孕性知識尺度の年代別正答率が〔図4〕です。10代から40代すべての年代で正答率が過半数なのは「喫煙は女性の妊娠する能力を下げる」でした。すべての年代で正答率が20%に満たないのが、「女性が標準的な体重より13キロ以上太りすぎると妊娠できないかもしれない」でした。

〔図4〕 妊孕性知識尺度※



■ 正解 ■ 不正解

(n=29634)

※Cardiff Fertility Knowledge Scale (カーディフ妊孕性知識尺度。頭文字をとってCFKSと呼ばれている) から最新データに一部改変

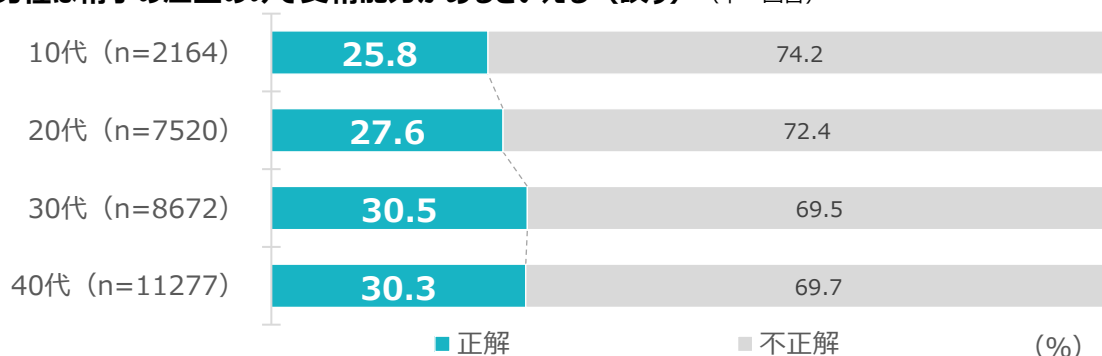
10代～40代に聞く、生殖や性の知識

妊孕性知識尺度13問中、正答率が低く、年代別で差があった項目は以下のとおり

■ 男性は精子の産生のみで受精能力があるといえる（答え「誤り」）

妊孕性知識尺度13問中、正答率が低く、年代別で正答率に差があった項目をみると、「男性は精子の産生のみで受精能力があるといえる」（「誤り」が正解）に正解した人は10代25.8%、20代27.6%、30代30.5%、40代30.3%となり、正しく認識していない人が約7割となっています【図5-1】。

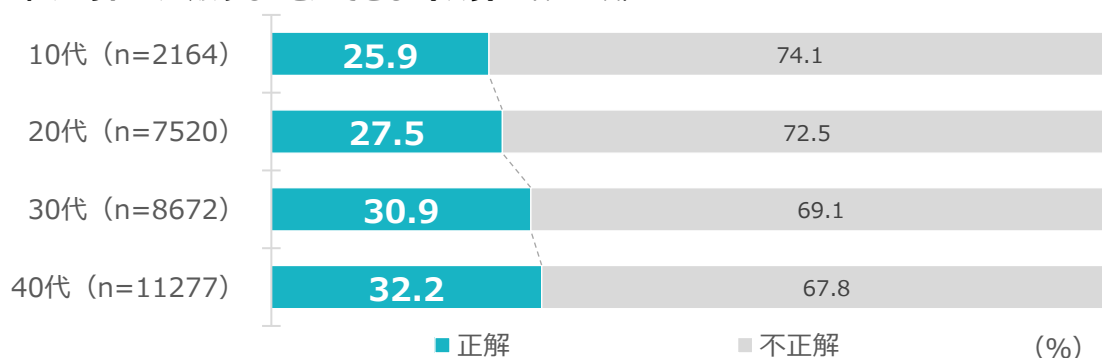
【図5-1】 男性は精子の産生のみで受精能力があるといえる（誤り）（単一回答）



■ 月経があれば妊娠することができる（答え「誤り」）

「月経があれば妊娠することができる」は「誤り」が正解です。こちらもどの年代も7割前後が誤った認識をしていますが、10代と40代で約6ポイントの差がありました【図5-2】。

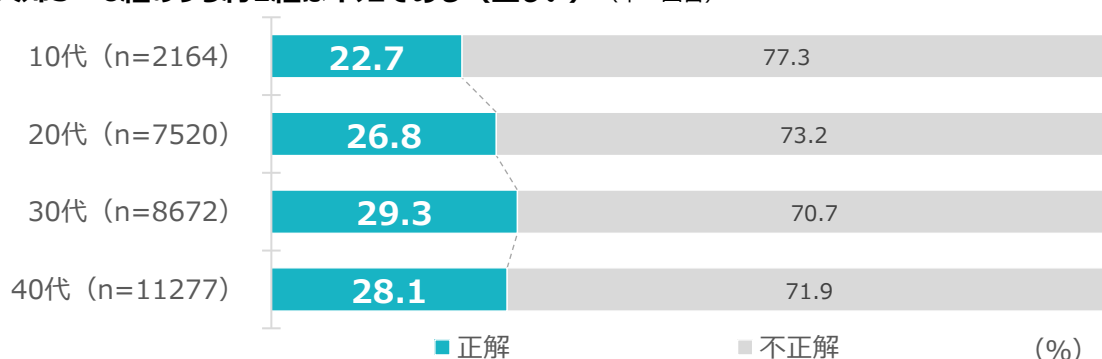
【図5-2】 月経があれば妊娠することができる（誤り）（単一回答）



■ 夫婦5～6組のうち約1組は不妊である（答え「正しい」）

「夫婦5～6組のうち約1組は不妊である」は「正しい」が正解ですが、正答率はどの年代も2割台です【図5-3】。

【図5-3】 夫婦5～6組のうち約1組は不妊である（正しい）（単一回答）



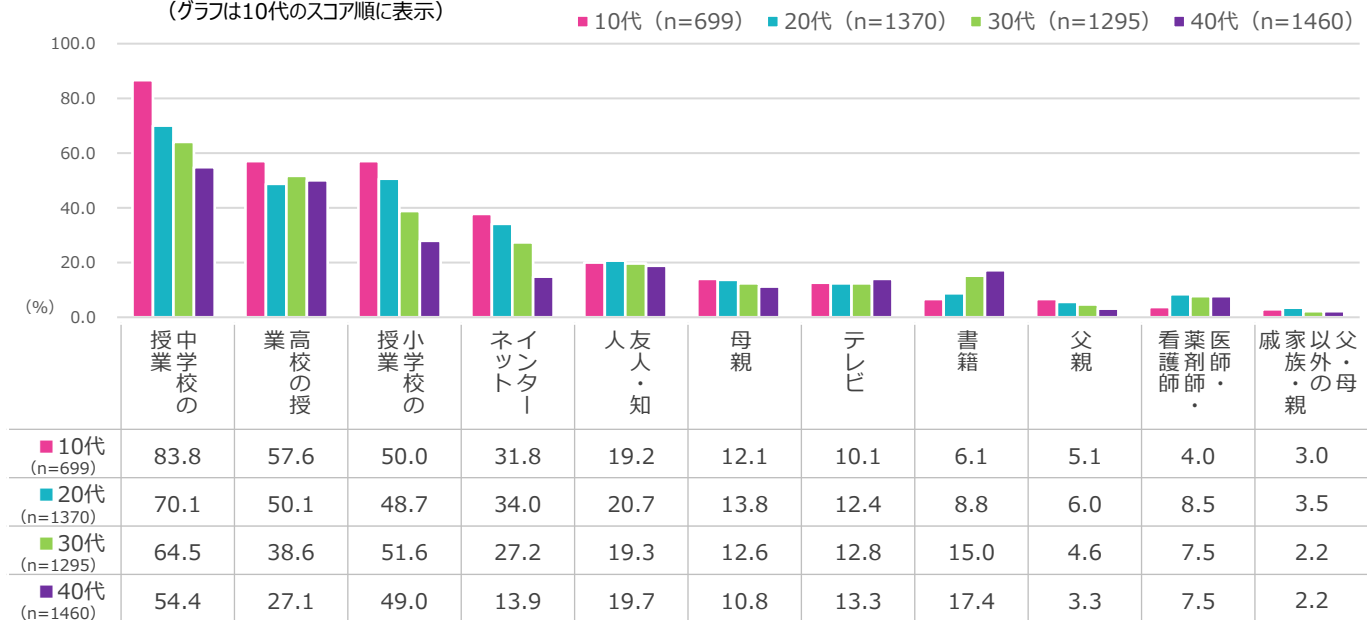
10代～40代に聞く、生殖や性の知識

■ 生殖や性に関する情報を得たのは、どの世代も「中学校の授業」がトップ

前述図3-1で生殖や性に関し、十分な知識を得たと答えた人に、生殖や性に関する情報を誰から教えてもらったかを聞きました。どの年代も「中学校の授業」がトップで、次いで順番は変わるものの「小学校の授業」または「高校の授業」、その後に10～30代では「インターネット」「友人・知人」が挙げられました〔図6-1〕。

【図6-1】 生殖や性に関する情報について誰から教えてもらったか（複数回答）

（グラフは10代のスコア順に表示）

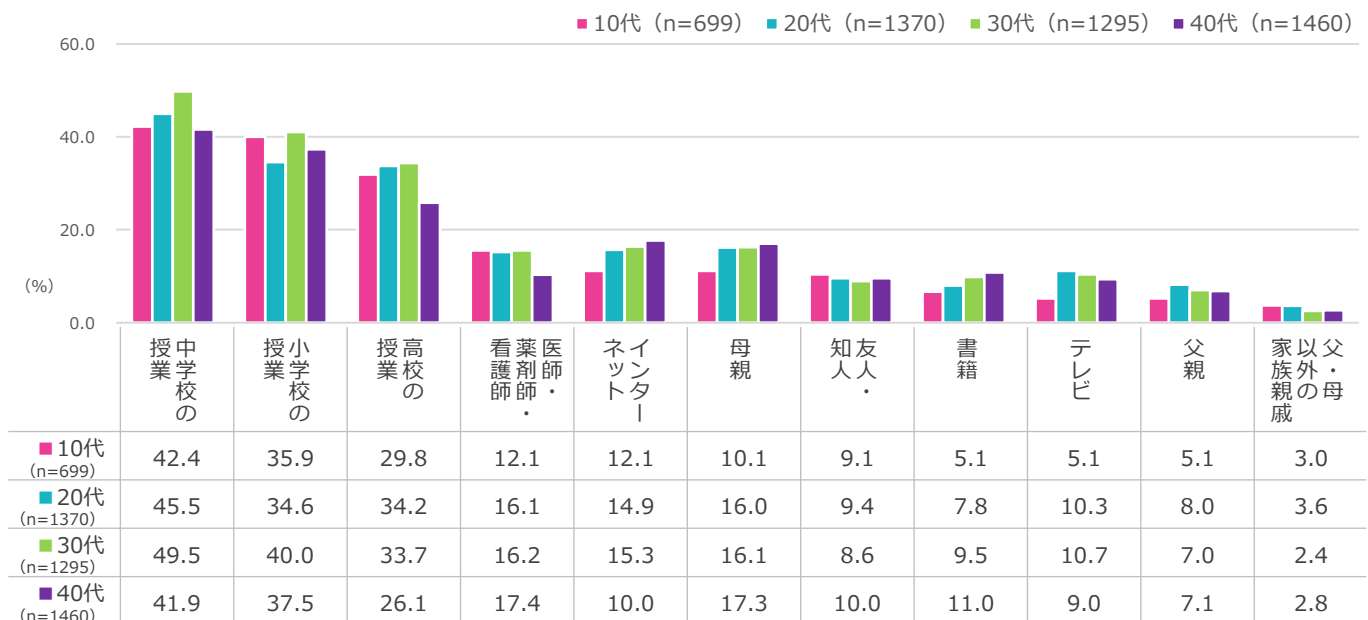


■ 生殖や性に関する情報を教えてほしかったのは、 「中学校の授業」が全体の4割強、続く「小学校の授業」も4割前後

さらに、生殖や性に関する知識を誰から教えてほしかったかと聞くと、「中学校の授業」がどの年代でも最も高く4割台でした。「小学校の授業」も各年代4割前後となっています〔図6-2〕。

【図6-2】 生殖や性に関する情報について誰から教えてほしかったか（複数回答）

（グラフは10代のスコア順に表示）



10代～40代に聞く、生殖や性の知識

■ 生殖や性に関して教わったことの上位は、「男女の身体や機能の違い」「月経」「妊娠」など

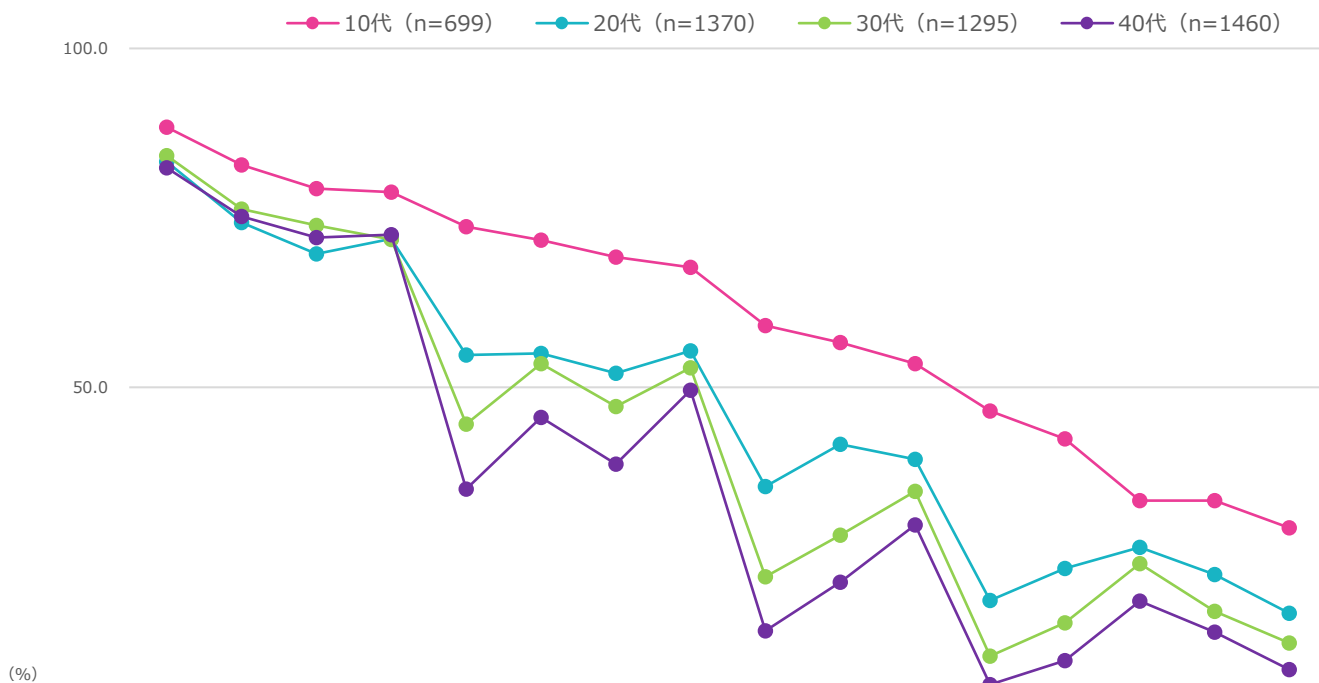
■ 10代の過半数は「性被害・性暴力」「ジェンダーの多様性やLGBTQ+」も学んでいる

生殖や性に関する十分な知識を得た人に、生殖や性について教えてもらった内容を聞きました。

どの年代も「男女の身体の違い」「男女の身体機能の違い」「月経（排卵）が起きる仕組み」「妊娠の仕組み」について教えてもらっている割合が他の情報より高くなっています。また、10代は16項目中11項目で半数以上が教わっているのに対し、他の年代は10代より低くなっています。「性感染症やその予防」「性被害・性暴力」「ジェンダーの多様性やLGBTQ+」については、10代とそれ以外の年代のスコア差が特に大きくなっています〔図7〕。

【図7】 生殖や性に関して教わった内容（複数回答）

（グラフは10代のスコア順に表示）



	男女の身体の違い	男女の身体機能の違い	月経（排卵）が起きる仕組み	妊娠の仕組み	性感染症やその予防	避妊の重要性	安全な避妊方法	射精の仕組み	性被害・性暴力	性行為の同意について	妊娠による身体への負担	ジェンダーの多様性やLGBTQ+	人権 価値観の違い、人はそれぞれ大切にされる権利があることなど	年齢と妊娠性（妊娠する力）の関連性	不妊症について	出生率と人口動態、国の経済力の関係性について
10代 (n=699)	88.4	82.8	79.3	78.8	73.7	71.7	69.2	67.7	59.1	56.6	53.5	46.5	42.4	33.3	33.3	29.3
20代 (n=1370)	83.3	74.3	69.7	71.9	54.8	55.0	52.1	55.4	35.4	41.6	39.4	18.6	23.3	26.4	22.4	16.7
30代 (n=1295)	84.2	76.3	73.9	71.8	44.6	53.5	47.2	52.9	22.1	28.2	34.7	10.4	15.3	24.0	17.0	12.3
40代 (n=1460)	82.4	75.2	72.1	72.5	35.0	45.6	38.7	49.6	14.1	21.3	29.7	6.2	9.7	18.5	13.9	8.4

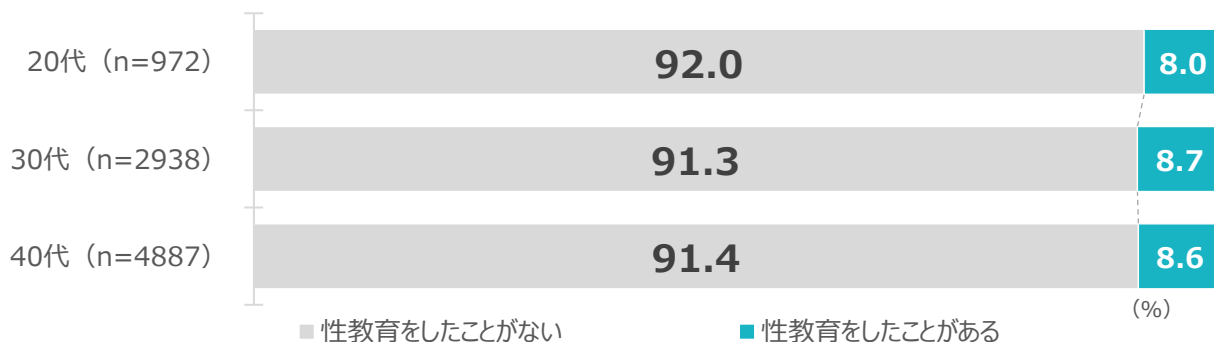
10代～40代に聞く、生殖や性の知識

■ 約9割の親が、自分の子どもに「性教育をしたことがない」

20代～40代の子どもがいる人に、自身の子どもの生殖や性に関する教育をした経験を聞きました。

「性教育をしたことがある」と答えたのは20代8.0%、30代8.7%、40代8.6%で、いずれも10%に満たない割合でした〔図8〕。

〔図8〕 親が自分の子どもに性教育をした経験（単一回答）



高校生の親と子に聞く、生殖や性に関する親子の会話

事前調査から親子間での生殖や性に関する教育はほとんどされていない、という実態が明らかになりました。

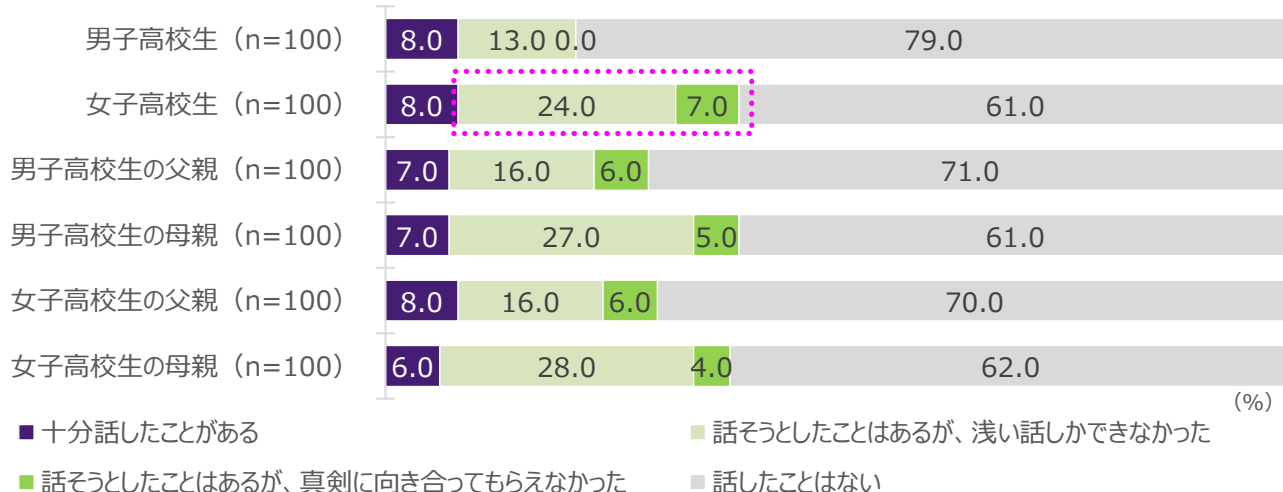
そこで、高校生の男女200人と、第一子が高校生の親400人を対象に、子世代と親世代の間の生殖や性に関するコミュニケーションの実態を深掘りしてみました。なお、本調査の対象者に親子関係はありません。

■ 生殖や性に関することで、親と「十分話したことがある」高校生は8.0%

■ 話さない理由は「気まずい」「恥ずかしい」

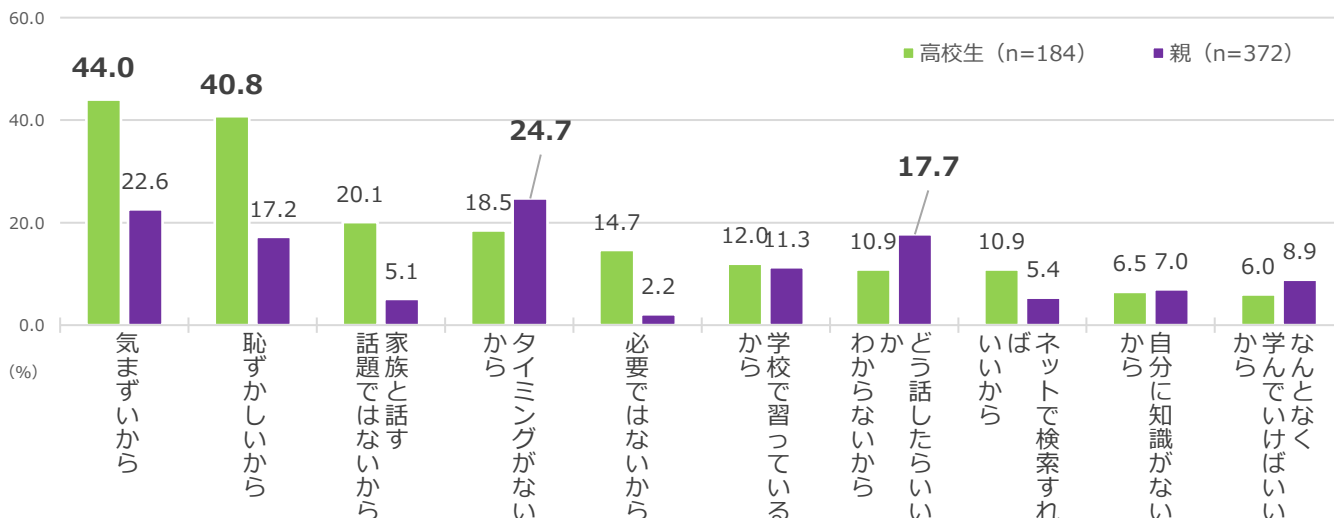
生殖や性に関する身体のことについて、親子で話し合った経験を聞きました。すると、「十分話したことがある」と答えた高校生は男女とも8.0%、親は男子高校生の父親・母親がそれぞれ7.0%、女子高校生の父親が8.0%、母親が6.0%でした。女子高校生のうち24.0%は「話そうとしたことはあるが、浅い話しかできなかった」、7.0%は「話そうとしたことはあるが、真剣に向き合ってもらえなかった」と答えています〔図9-1〕。

【図9-1】 生殖や性に関する身体のこと親子で話し合った経験（単一回答）



十分に話したことがない高校生（184人）と親（372人）にその理由を聞きました。高校生は「気まずいから」（44.0%）、「恥ずかしいから」（40.8%）が高く、親は「タイミングがないから」（24.7%）、「どう話したらいいかわからないから」（17.7%）が高校生に比べ高くなっています〔図9-2〕。

【図9-2】 生殖や性に関する身体のこと親子で話したことがない理由（複数回答）（グラフは高校生のスコア順に表示）



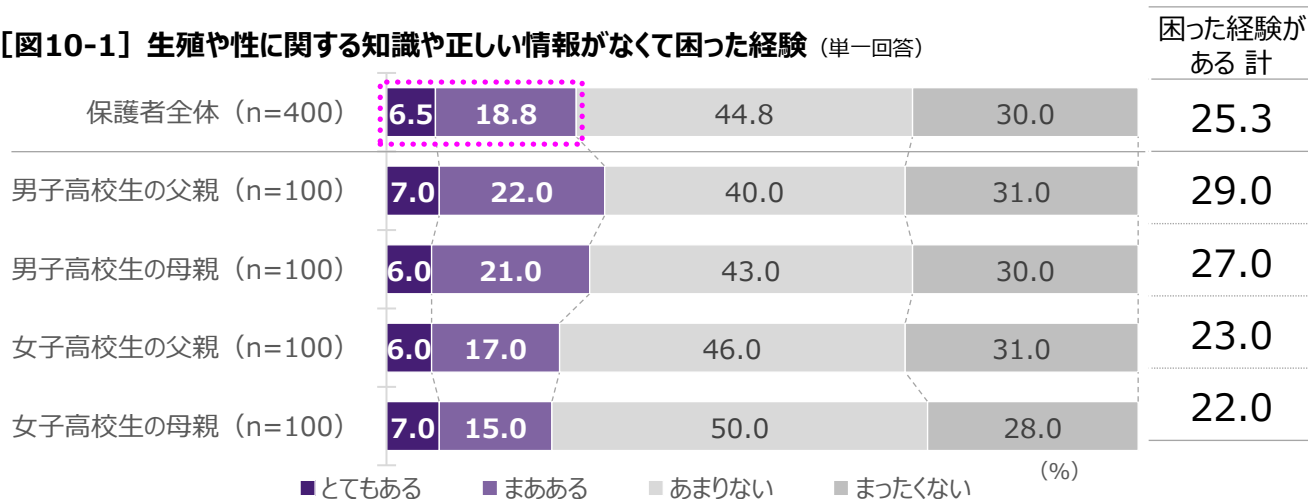
高校生の親と子に聞く、生殖や性に関する親子の会話

■ 生殖や性に関する知識や情報がなくて困った経験がある親は25.3%

■ 男子高校生の父親が困ったのは「女性の身体の仕組み」、母親は「安全な避妊方法」

高校生の親に、生殖や性に関する知識や正しい情報がなくて困った経験を聞きました。すると、6.5%が「とてもある」、18.8%が「まあある」と答え、合わせて親の25.3%が知識や情報がなくて「困った経験がある」としています。男子高校生の父親では、29.0%といちばん多くなっています〔図10-1〕。

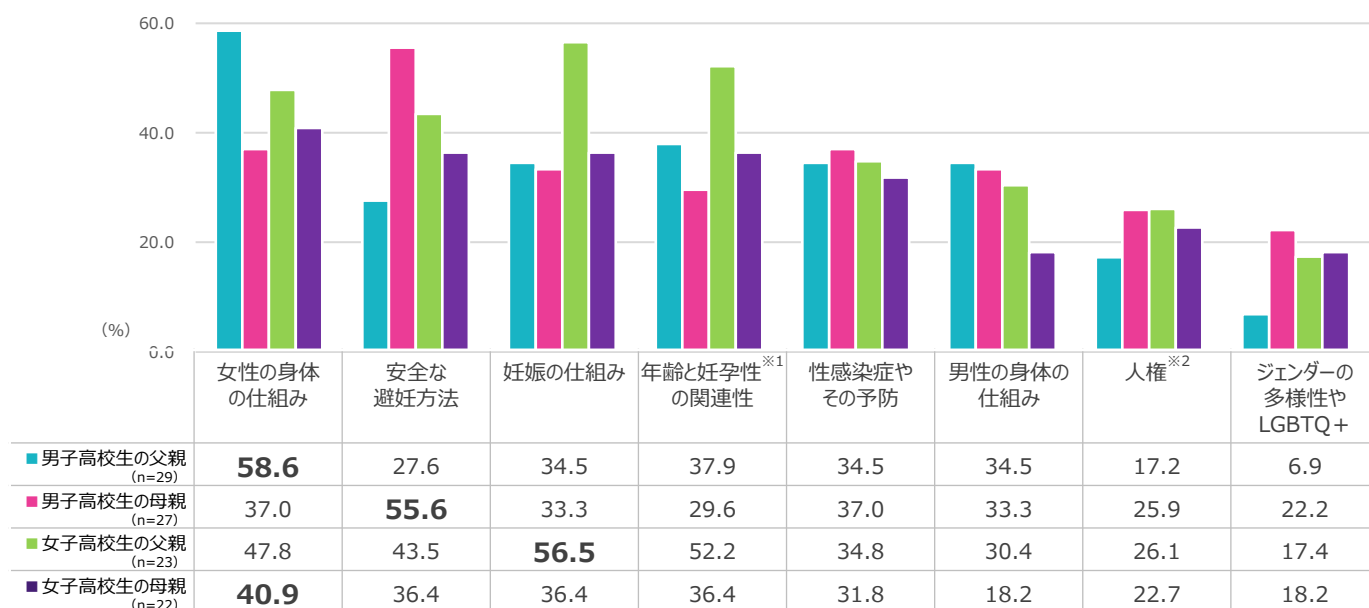
【図10-1】 生殖や性に関する知識や正しい情報がなくて困った経験（単一回答）



困った内容を聞くと、男子高校生の父親は「女性の身体の仕組み」（58.6%）、男子高校生の母親は「安全な避妊方法」（55.6%）、女子高校生の父親は「妊娠の仕組み」（56.5%）、女子高校生の母親は「女性の身体の仕組み」（40.9%）がトップでした。女子高校生の父親のスコアが高いものが多くなっています〔図10-2〕。

【図10-2】 生殖や性に関する知識や正しい情報がなくて困った内容（複数回答）

■ 男子高校生の父親（n=29） ■ 男子高校生の母親（n=27） ■ 女子高校生の父親（n=23） ■ 女子高校生の母親（n=22）



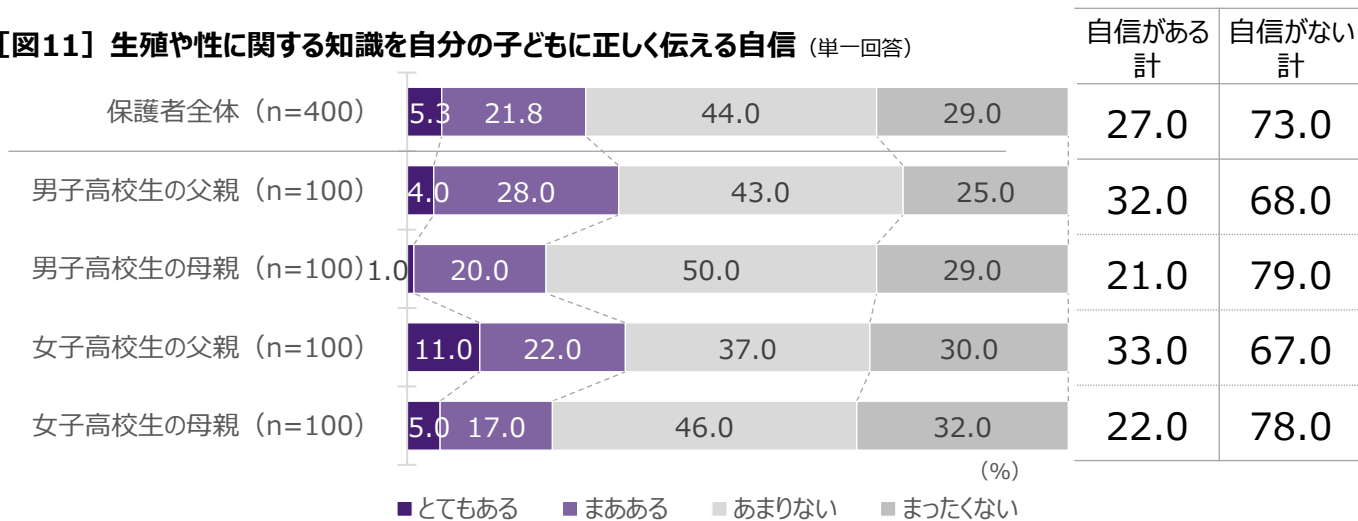
※1 妊孕性＝妊娠する力のこと ※2 人権＝価値観の違い、人はそれぞれ大切にされる権利があることなど

高校生の親と子に聞く、生殖や性に関する親子の会話

■ 生殖や性に関する知識や情報がなくて困った経験がある親は25.3%にとどまった一方で、親の73.0%は、生殖や性に関する知識を子どもに正しく伝える「自信がない」

高校生の親全員に、生殖や性に関する知識を自分の子どもに正しく伝えられる自信があるかを聞きました。すると、44.0%が「あまりない」、29.0%が「まったくない」と答え、合計で親の73.0%は正しく伝えられる自信がないと答えています。父親（男子高校生の父親68.0%／女子高校生の父親67.0%）に比べると、母親（男子高校生の母親79.0%／女子高校生の母親78.0%）の方が自信がない割合が高くなっています【図11】。

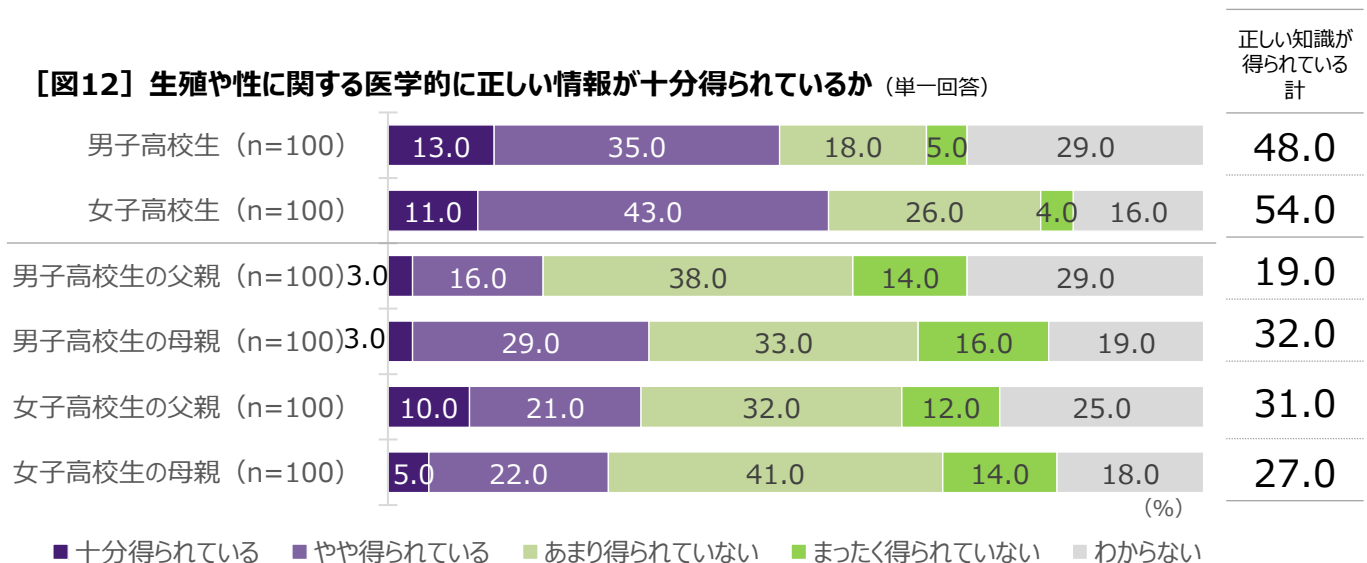
【図11】 生殖や性に関する知識を自分の子どもに正しく伝える自信（単一回答）



■ 生殖や性に関する医学的に正しい情報が、高校生は約半数が“得られている”と回答 一方、親はスコアが低く、男子高校生の父親は19.0%

全員に、生殖や性に関する医学的に正しい情報が十分得られていると思うか聞きました。男子高校生は48.0%、女子高校生は54.0%が“正しい知識が得られている”（十分得られている＋やや得られている）と答えたのに対し、親は“正しい知識が得られている”と答えた割合が低く、中でも男子高校生の父親は19.0%でした【図12】。

【図12】 生殖や性に関する医学的に正しい情報が十分得られているか（単一回答）



高校生の親と子に聞く、生殖や性に関する情報源

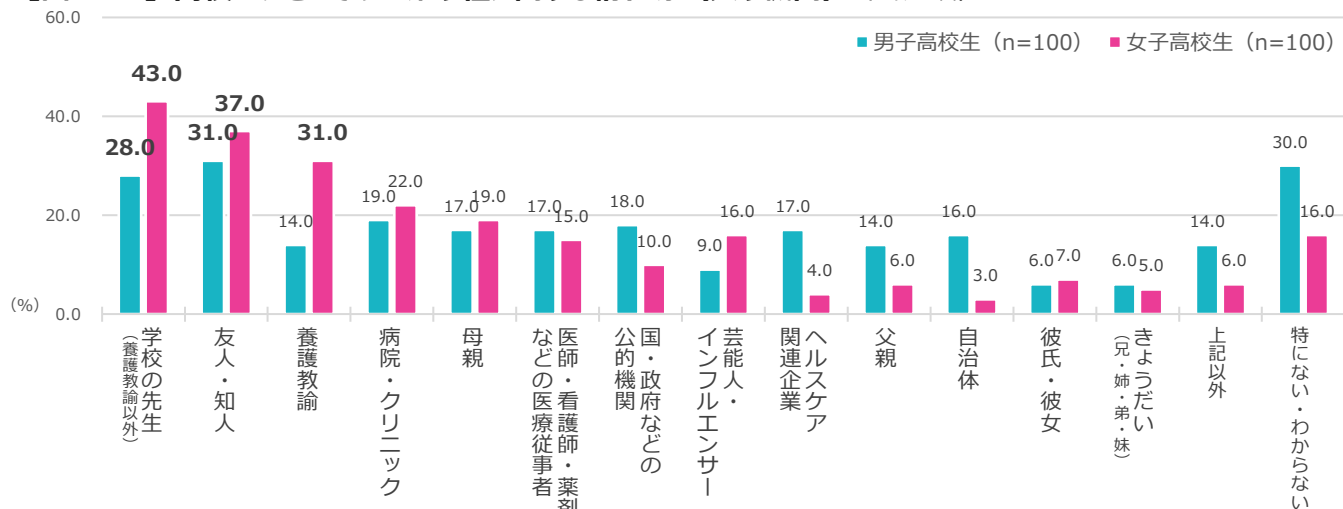
■ 高校生にとって、生殖や性に関する人や機関の情報源は「友人・知人」「学校の先生」が最多

一方、親にとっての生殖や性に関する情報源は、「特にない・わからない」が最多

※当設問では、メディア以外の情報源を指します。メディアなどの情報源はP14

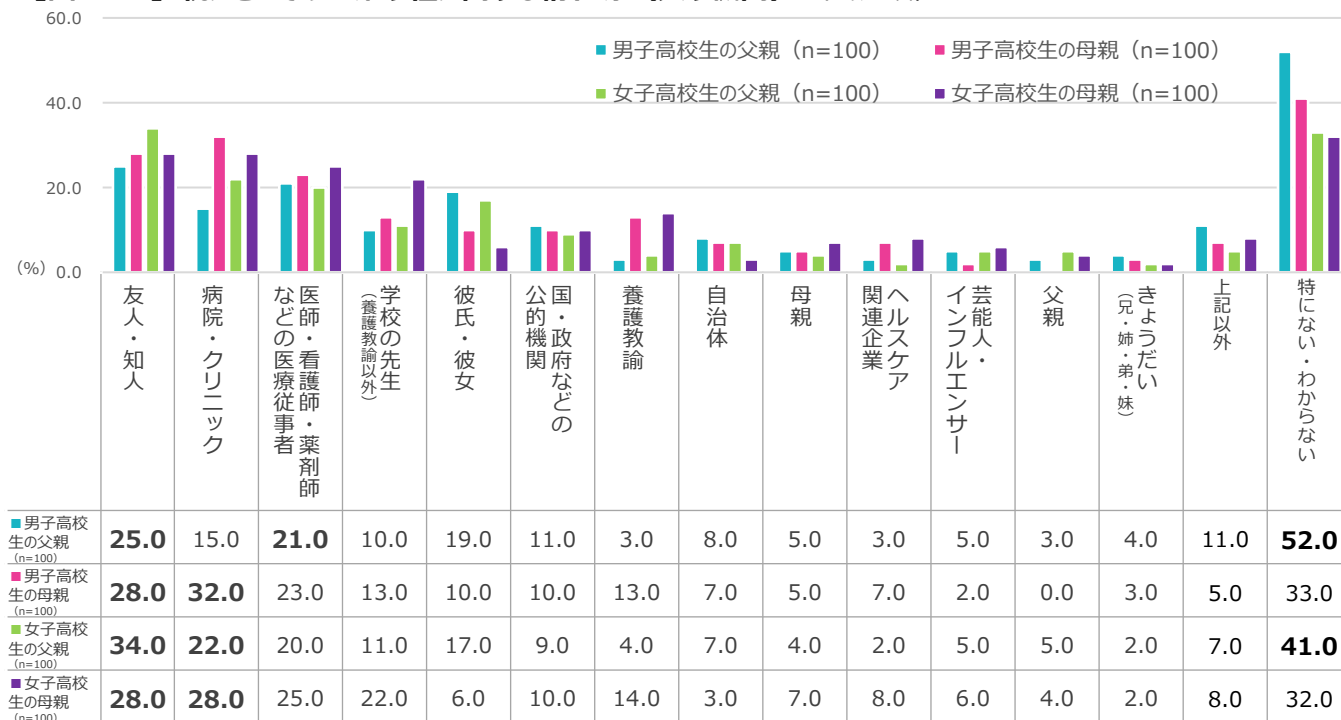
生殖や性に関する情報源（人や機関。メディアは含まず）を聞きました。男子高校生は「友人・知人」（31.0%）、「学校の先生（養護教諭以外）」（28.0%）、女子高校生は「学校の先生（養護教諭以外）」（43.0%）、「友人・知人」（37.0%）、「養護教諭」（31.0%）が多くなっています〔図13-1〕。

【図13-1】 高校生にとっての生殖や性に関する情報源（人や機関）（複数回答）



親にも同様の質問をすると、男子高校生の父親は「友人・知人」（25.0%）、「医師・看護師・薬剤師などの医療従事者」（21.0%）、母親は「病院・クリニック」（32.0%）、「友人・知人」（28.0%）、女子高校生の父親・母親は「友人・知人」「病院・クリニック」が上位でした。親は「特にない・わからない」の割合が高校生より高くなっています〔図13-2〕。

【図13-2】 親にとっての生殖や性に関する情報源（人や機関）（複数回答）



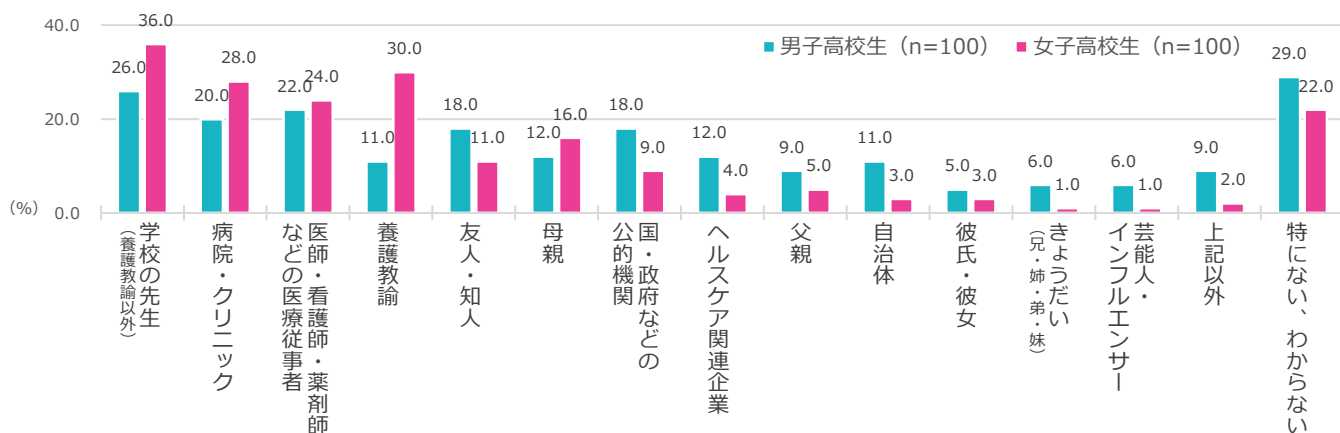
高校生の親と子に聞く、生殖や性に関する情報源

■ 生殖や性に関し信頼する情報源は、女子高校生は「先生」、男子高校生は「特にない・わからない」が最多

■ 親にとって信頼する情報源は、「特にない・わからない」が最多

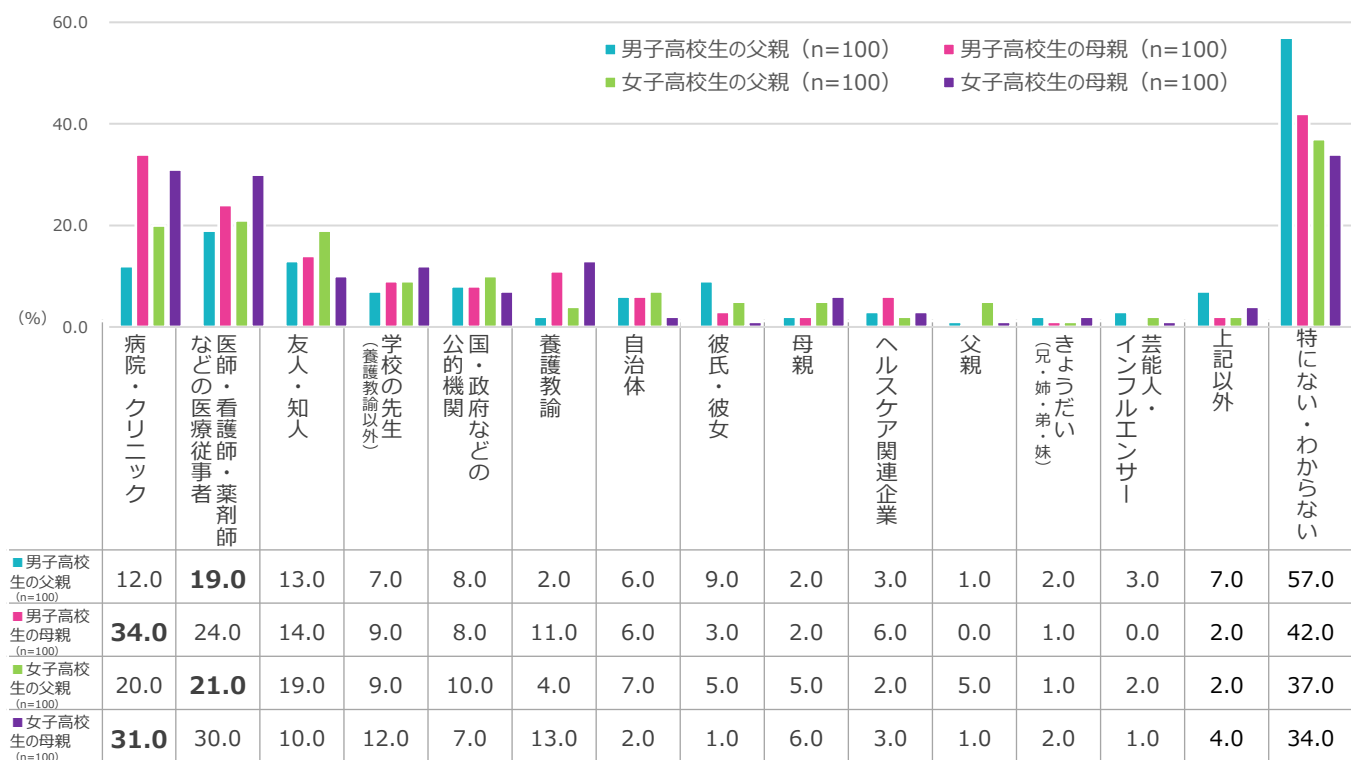
続いて、生殖や性に関して信頼できる情報源を聞きました。高校生では「学校の先生（養護教諭以外）」（男子高校生26.0%、女子高校生36.0%）や「病院・クリニック」「医師・看護師・薬剤師などの医療従事者」などの専門家が上位となっています。女子高校生は「養護教諭」も上位です。「友人・知人」を挙げたのは、男女とも1割台でした。一方、情報源が「特にない、わからない」も20%台（男子高校生29.0%、女子高校生22.0%）で男子高校生では最多でした。[図14-1]。

【図14-1】高校生の生殖や性に関する信頼できる情報源（複数回答）



親にも同様の質問をすると、「特にない・わからない」が最多でした。その中で挙げられた信頼できる情報発信者は、男子高校生・女子高校生それぞれの父親はともに「医師・看護師・薬剤師などの医療従事者」（男子高校生の父親19.0%、女子高校生の父親21.0%）、母親はともに「病院・クリニック」（同34.0%、31.0%）でした [図14-2]。

【図14-2】親の生殖や性に関する信頼できる情報発信者（複数回答）



高校生の親と子に聞く、生殖や性に関する情報源

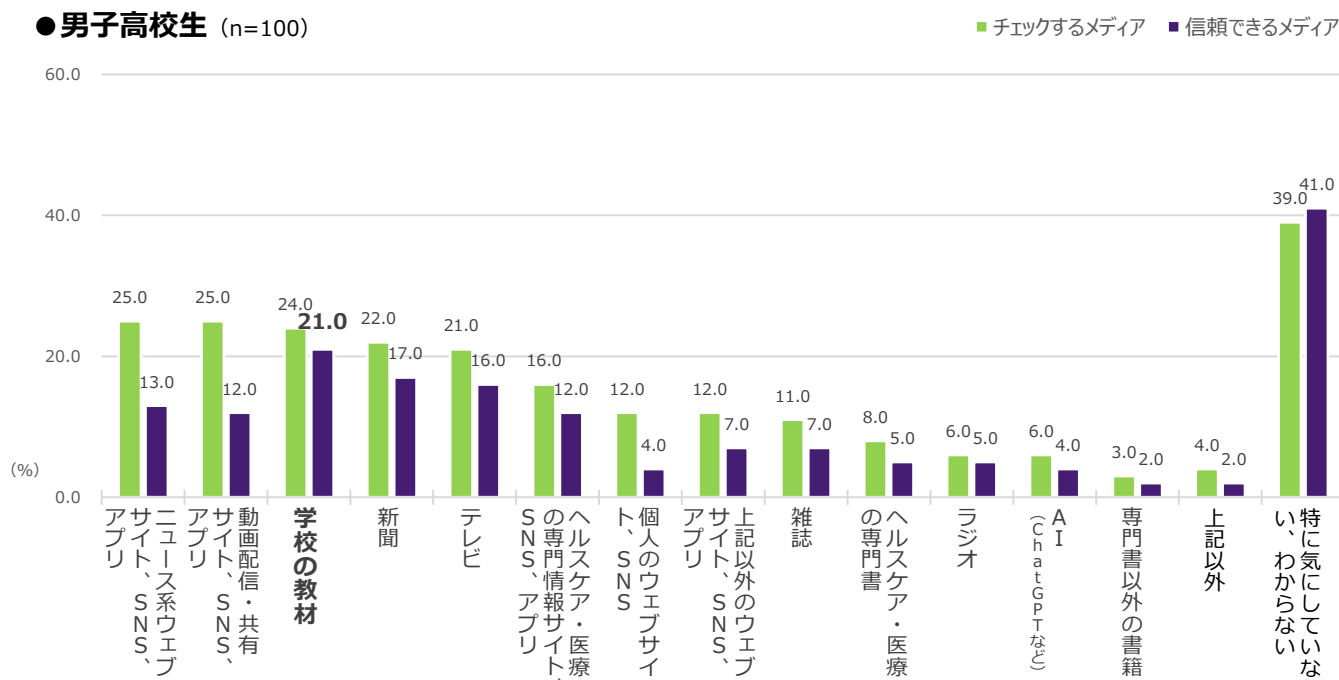
■ 男女高校生が生殖や性に関して一番信頼するメディアは「学校の教材」

生殖や性に関する情報を得る際のメディアについて、チェックするメディアと信頼できるメディアをそれぞれ聞きました。

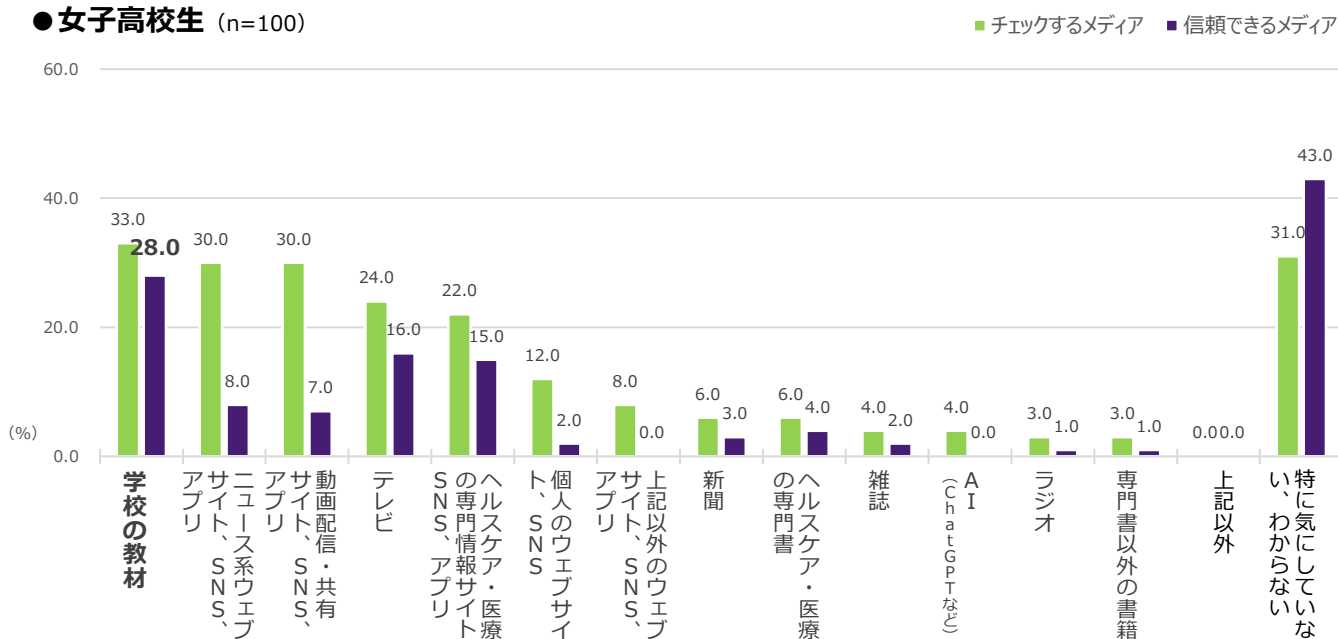
男子高校生がチェックするメディアは「ニュース系ウェブサイト」「動画配信・共有サイト」（同率25.0%）、「学校の教材」（24.0%）が挙げられ、信頼できるメディアは「学校の教材」（21.0%）がトップでした。女子高校生がチェックするメディアも「学校の教材」（33.0%）、「ニュース系ウェブサイト」「動画配信・共有サイト」（同率30.0%）が上位に挙げられましたが、一方で信頼できるのは「学校の教材」（28.0%）がトップでしたが、チェックするメディアも信頼できるメディアも「特に気にしていない、わからない」が最多でした〔図15-1〕。

〔図15-1〕 高校生が生殖や性に関する情報を得る際にチェックするメディアと、信頼できるメディア（複数回答）

● 男子高校生（n=100）



● 女子高校生（n=100）



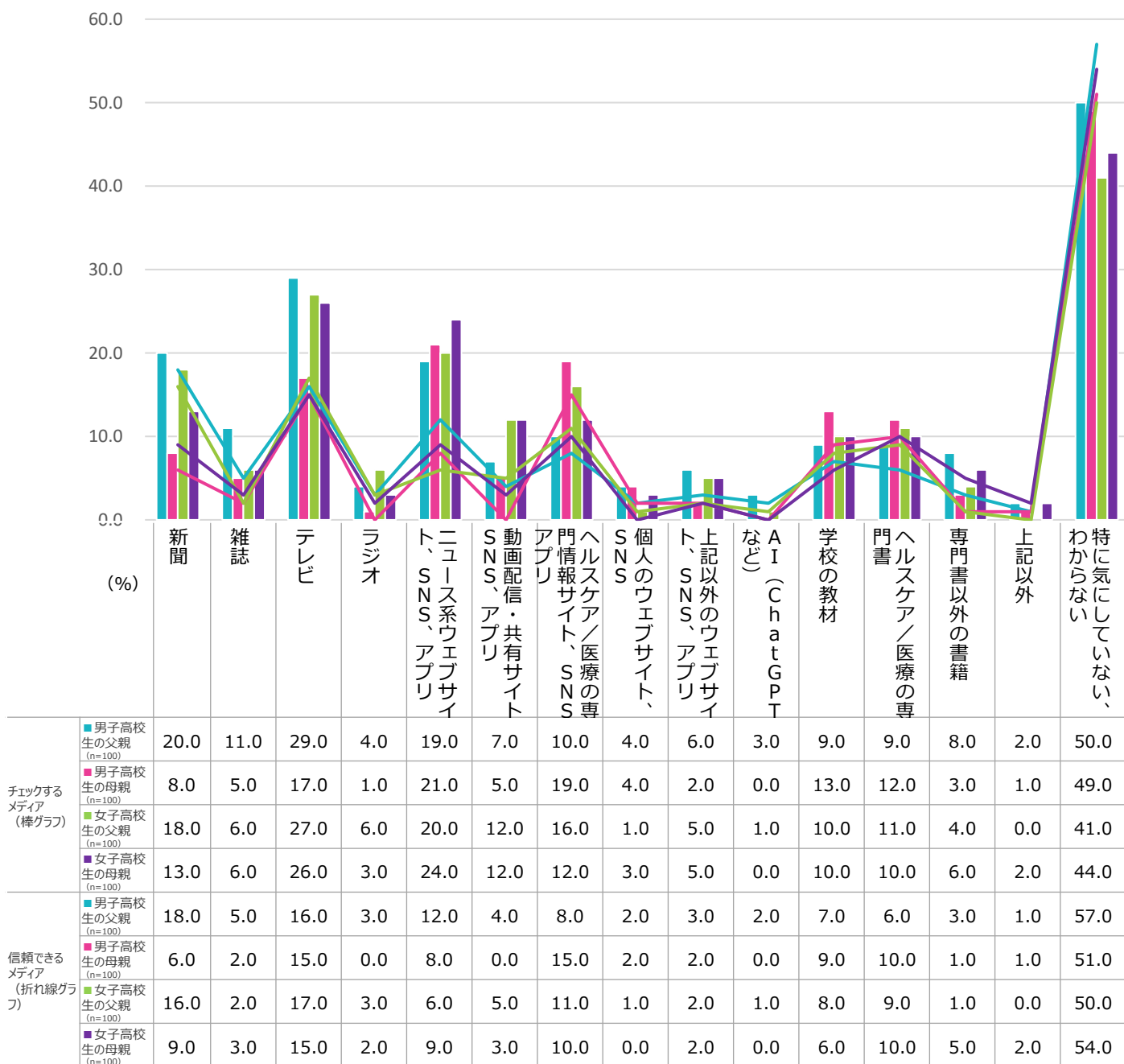
高校生の親と子に聞く、生殖や性に関する情報源

■ 親が、生殖や性に関してチェックするメディアや、信頼できるメディアについては、 「特に気にしていない、わからない」が約半数と最多

高校生の親がチェックするメディアは「テレビ」や「ニュース系ウェブサイト、SNS、アプリ」が多くなっています。一方で、最も割合の高い「特に気にしていない、わからない」は5割前後になっています。

一方、信頼できるメディアは男子高校生の父親の「新聞」を除き、「テレビ」が最も高くなっています。信頼できるメディアについても、男子高校生、女子高校生の父親、母親いずれも「特に気にしていない、わからない」が約半数となっています【図15-2】。

【図15-2】 高校生の親が生殖や性に関する情報を得る際にチェックするメディアと、信頼できるメディア（複数回答）



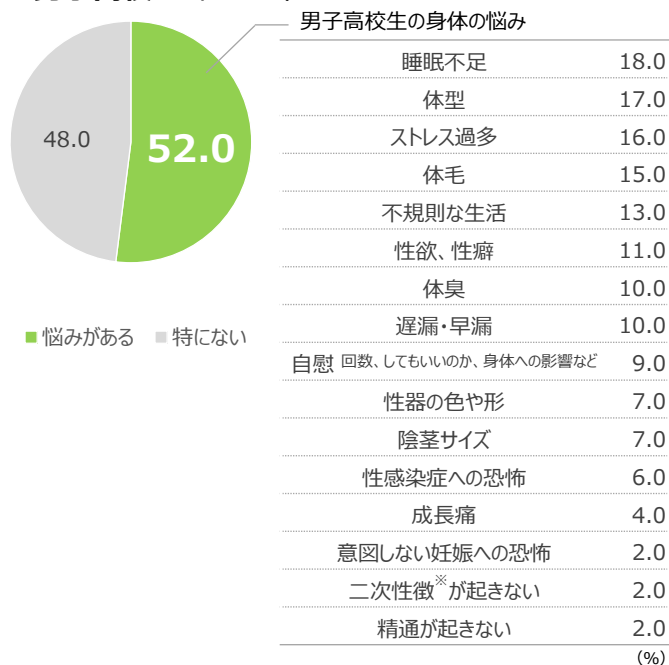
高校生に聞く、身体の悩み

■ 女子高校生の80.0%、男子高校生の52.0%が「身体に関する悩みを持っている」

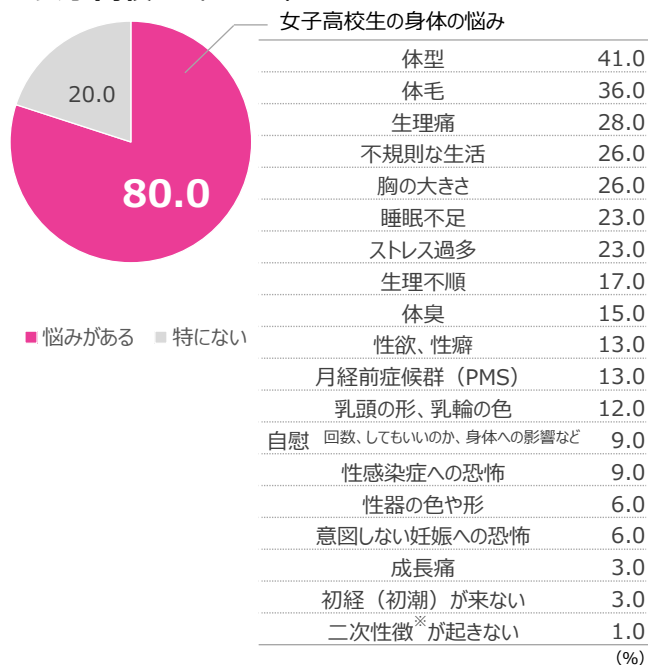
次に、高校生に身体の悩みを聞きました。男子高校生は52.0%が何らかの悩みがあり、「睡眠不足」(18.0%)、「体型」(17.0%)、「ストレス過多」(16.0%)が多くなっています。女子高校生は80.0%が悩みがあり、「体型」(41.0%)、「体毛」(36.0%)、「生理痛」(28.0%)が上位でした〔図16〕。

〔図16〕 高校生の身体の悩み (複数回答)

●男子高校生 (n=100)



●女子高校生 (n=100)



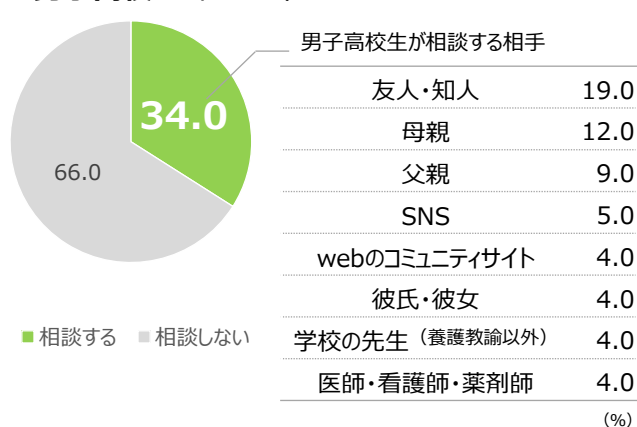
※二次性徴は乳房・陰毛・性器の発育などの体の変化のこと

■ 高校生の身体の悩み、男子は「友人・知人」、女子は「母親」に相談

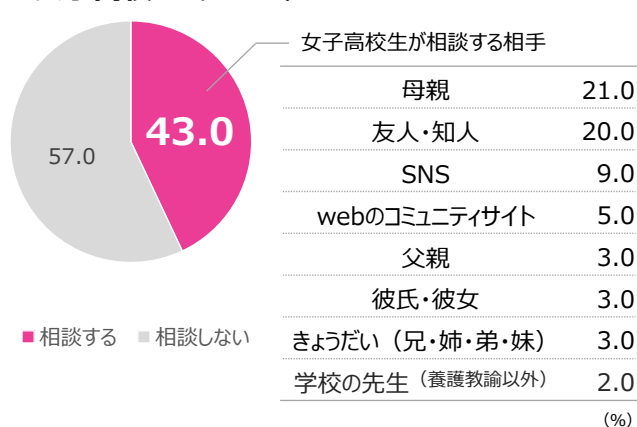
身体の悩みを相談する相手を聞くと、男子高校生は「友人・知人」(19.0%)、「母親」(12.0%)、「父親」(9.0%)、女子高校生は「母親」(21.0%)、「友人・知人」(20.0%)、「SNS」(9.0%)の順でした。身体の悩みを誰かに相談するのは、男子34.0%、女子43.0%で、男女とも相談しない人が多くなっています〔図17〕。

〔図17〕 身体の悩みの相談相手 (複数回答)

●男子高校生 (n=100)



●女子高校生 (n=100)



webのコミュニティサイトは、Yahoo!知恵袋、教えてgoo! など

櫻井 裕子（さくらい ゆうこ）先生

思春期保健相談士
日本思春期学会性教育認定講師

大学病院産科や産婦人科医院などでキャリアを積み、現在、地域母子保健事業、看護、助産専門学校非常勤講師を務めると共に、小中高大学生 & 親に包括的性教育やプレコンセプションケアについての講演を年間100回以上行っている（2023年度157回）。著書に「10代のための性の世界の歩き方」時事通信社。一般社団法人埼玉県助産師会プレコンセプションケアプログラム普及啓発事業主任、埼玉県母性衛生学会理事、一般社団法人“人間と性”教育研究協議会全国幹事、彩の国思春期研究会理事等を務める。

包括的性教育は「不幸にならないため」ではなく「幸せになるため」の学び。講演を通して性について仲間と語り合う楽しさや大切さに気づき、最後は「幸せになるために自分で決める力」を持つための、ちょっとしたきっかけ作りができれば、という気持ちで24年間、性教育を行っている。



性や生殖に関連する健康について考えるきっかけが重要

2024年6月に発表された女性が生涯に産む子どもの平均数「合計特殊出生率」は1.20で過去最低となり、出生数も過去最少を更新するなど、子どもを産み育てる環境の改善は喫緊の課題です（※1）。数年前、複数の中学校で「将来子どもが欲しいか」「何歳で欲しいか」を聞き取ったことがありました。どの学校のどの学年でも性別にかかわらず「子どもが欲しい」とする生徒は半数以上、理想の結婚年齢は25歳、出産年齢も25歳がトップでした。個別のコメントでも結婚にも出産にも夢を持っているものが多かったと記憶しています。一方ここ数年、講演や講義で同様に生徒や学生に尋ねると、結婚にも出産にも育児にも消極的になっていると感じます。今回の調査結果とリンクするものと考えます。今回の調査の「その理由」では、全体的に育児を「一人で抱えるもの」とイメージしている傾向が読み取れます。妊娠した人しか出産できませんが、出産した人しか育児ができない訳ではありません。周囲を巻き込む力、関係性作りを学ぶ機会も必要です。まずは、現状で子どもを望む望まないにかかわらず、自身の健康について、特に性と生殖に関連する健康について気が付くこと、気がかりなことがあったら、誰かに話したり頼ったりする力を育成することが重要です。その上で自らのライフプランについて、早いうちから考えていくきっかけを創出するという、学びの機会、環境整備が求められているのではないのでしょうか。

10代では「13.5歳」で、生殖や性に関する十分な知識を得たかったと回答するも、性教育は未だに子どもたちの期待に応えられていないのが現状

生殖や性に関する教育を「受けたくない」「わからない」を選択した人は、すでに性教育に良くないイメージを持っている可能性があります。苦手意識が育つ前、早めに学習の機会が提供されることが望まれます。そして「受けたい」という人はすべての年齢で「もっと早く知っていた」ということが明らかになりました。一方、学校現場では学習指導要領の関係で、学習内容に制限が加えられ、子どもたちの実態に見合った教育が行われにくいのが実情です。私は、すでに性的なトラブルが多数発生している高校においても生殖の仕組み、特に避妊について具体的な内容に触れることができないというもどかしい経験もしています。生殖の仕組みを知り、具体的な避妊の方法を知り、それを選択でき決定できる力はSRHR（性と生殖のための健康と権利）を保障するものであり、全ての人が等しく手に入れられるべきものと考えます。また、今回の調査で明らかになった「妊孕性に関する正答率の低さ」や、子どもたちに性教育という生きる上で大切なことを伝えていく親側の「性教育を教える自信のなさ」からも、求められている性教育が実践できていない現状と、それによって困るのはいつの時代も当事者である若者だということを私たち大人は忘れてはなりません。

高校生が生殖や性に関する信頼できる情報源として挙げる「学校」。そして親子間での性教育の重要性

前述の理由で、中学校では性交や避妊や中絶を取り扱わない学校が多いのが実態です。授業での扱いもそうですが、外部講師に依頼しても制限が加わることがあるため、今回の調査では「避妊の重要性」「安全な避妊法」を学習したとなっていることに少々驚いています。扱う学校が増えたのであれば喜ばしいことです。一方、親世代では性と生殖に関する知識や正しい情報がなくて「困った経験がある」人は約25%、自分の子どもに正しく伝える「自信がない」が73%に上ります。今はスマートフォン一つでどこからでも情報が取れてしまいます。不確かな情報に触れる前に、学校での教育と並行して、親子間でも気兼ねなく性の話ができる環境を整えていくことも必要です。そのためには親世代もアンテナを高くし、信頼できる情報源を探しておくことも重要と考えます。